



令和 8 年度 外国語科・外国語活動実践・研究計画

部 員 ○石田智之、山崎泰明、奥田瑞季、大森果歩、佐藤咲紀、丹理人

Ⅰ 外国語科・外国語活動における
自律した学習者の姿

- 1 コミュニケーションを行う目的や場面、状況等に応じて、必要な語句や表現、方法を選択・決定し、言語材料を駆使して伝え合う姿
- 2 外国語を用いて相互に理解し合う自然なやり取りの中で、相手に配慮しながら伝えたいという強い思いをもって、活動上の困難を乗り越えるために既習表現を活用したり新たな表現を使ったりしようとしながら、表現の幅を広げる姿

Ⅱ 外国語科・外国語活動における
授業デザインの取組

- A 伝えたいという強い思いを基に、子どもが使いたい表現や方法を選びながら、相手に伝わる実感を伴う体験を積み重ねる活動の工夫
- B 表情豊かなやり取りなどのモデル提示や相手との関わりを通して、必要な表現の幅を広げていく学びのスタイルの構築

Ⅲ 1・2 年次研究で生成した仮説

	問題解決に没頭する子どもの姿 (数字は、自律した学習者との関連)	要因・手立て (英字は、授業デザインの取組との関連)
一 年 次	自分が伝えたいことが伝わるように、困ったときには周囲に助けを求めたり、手元にあるものを使ったりしながら、その場にある、自分がもてる力を総動員して英語でコミュニケーションを図った姿 (1)	あまりよく理解していない相手であり、意思疎通するツールが英語しかない相手との交流の場を設定したこと (A)
	その場にいる相手と温かい関わりをもちながら、コミュニケーションを続けようとした姿 (2)	友達になった相手を、他の人に紹介する活動を、単元の最後に設定したこと (B)
二 年 次		

Ⅳ 1 年次研究の課題と、改善するための手立て

	課題となった子どもの姿 (数字は、自律した学習者との関連)	改善するための手立て (英字は、授業デザインの取組との関連)
一 年 次	相手と友達になろうと英語で伝え合う中で、留学生と温かい関わりをもちながら安心してやり取りを楽しむことができた一方で、言いたいことがスッと出てこないもどかしさを感じ、失敗への恐れもあつてか発話をためらった姿 (1、2)	これまでの慣れ親しみが一過性に終わっていたことが原因と考えられるため、既習表現の取り扱いを単元のみで終わらせず、系統的・横断的に「慣れ親しみを直す場」を意識的に設けることで、子どもにとっての本質的な慣れ親しみとなり、身に付いて使える英語にする。(A)